

スポーツが触発する国民意識への新たなモメント

—南太平洋で展開される FIFA のサッカー振興の事例から—

小林 勉*

How to Develop Sport in Developing Countries? :

A Case Study of the FIFA Development Program in the South-Pacific Region

KOBAYASHI Tsutomu

Abstract

The number of IOC and IF member countries exceeds that of UN member countries. Therefore these organizations have the merit of being able to integrate the developed and developing countries on a global level, through the international character of sport rules. Against this background, few studies have been carried out focusing on sport development in developing countries in the context of national development. This paper examines assumptions that are often associated with sport development as a basis for thinking about aspects of sport in developing countries. Case-study research is used to substantiate the arguments made about Vanuatu soccer in the South-pacific region. Vanuatu soccer has been undergoing transformation in the last decade, under the influence of the FIFA development program. This work examines the specific effects of globalization on soccer in developing countries. It is argued that it is unrealistic to expect sport to sustain a notion of civic engagement or social capital without addressing the issue of how to create the world-standard-soccer development structure in developing countries. The paper looks closely at the background of world-wide development of integrating organizations and describes the unexpected problems that have been occurring in the developing countries.

はじめに¹⁾

先進国と途上国の格差是正へ向けた協力活動は先進国側の免れえない責任として顕在化し、そうした格差を是正しようと「経済開発」の方向に加えて、人間的・社会的側面を重視しようとする「社会開発」などが積極的に展開されてきている。社会開発という考え

方は、住民参加、貧困対策、女性支援、栄養、保健衛生、教育などのいわゆる社会部門に加え、人権、民主化、環境、人口・家族計画、ODA と NGO の連携、雇用と小規模企業開発など多岐にわたるが、生産の担い手たる人間の生命的・社会的再生産のための環境を整えることが、21 世紀の国際社会において最重要課題のひとつとして捉えられているという点では共通する。

このように開発問題として捕捉すべき対象が広範囲に拡大するなか、国家や民族という

* 中央大学総合政策学部准教授

名古屋大学大学院国際開発研究科客員研究員 (平成 18 年 7 月～9 月)

枠組みを突き抜ける契機としてその可能性をスポーツに見だし、それを積極的に活用しようとする動きが近年目につくようになってきた。オリンピックを「平和の祭典」と謳い、スポーツを通じて国家間の協調を図り、平和の構築を訴えようとするなどはその典型である。また国際オリンピック委員会(International Olympic Committee:以下IOCと表記)やFIFA(国際サッカー連盟)など各国際スポーツ団体が、国連をはじめとした各国際機関と協働で様々な活動を展開するの、スポーツを単なる余暇活動と考える以上に、開発問題へ好影響をもたらすものとして期待を集めているがゆえにほかならない。

しかしながら、スポーツの影響力が増大してきているにもかかわらず、開発問題と絡められたところでスポーツが研究の対象にされることはこれまで少なかった。ジャネット＝リーヴァー(1996)が、ブラジル社会に占めるサッカーの役割について分析して導き出した「階級、民族、人種、宗教を異にする人々に、共有できるものを提供することによって、スポーツは国民統合に寄与する」とした見解や、国家政治レベルとは別に、ネットワークと共同体感覚の形成をスポーツの中に見出し、国家以下または国家以上のレベルでの結びつきの発展のためにはスポーツが重要な手段となりうるとしたHarveyやHoule(1994)の見解は、民族や国家の枠組みが揺らぎ始めている現代において、様々な差異を乗り越えようとする推進力としてスポーツをとらえているところで視座を共有しているが、いずれも途上国の開発問題に直接的に結びつけて論じられたわけではなかった。

また、国際協力の観点から途上国のスポーツについて論じられることがあったとしても、

その多くは教育的観点からスポーツの効用が宣揚されたり、健康の関数として語られるにとどまり、途上国のスポーツがどのように展開され、途上国においてスポーツを振興していくことの政策的な意義について主題化されたものはほとんどなかったというのが現状である²⁾。言い換えると、スポーツに世界中の人々が熱狂するという現象には多くの関心が向けられてきたものの、様々な民族や多様な文化の差異を乗り越えてそうした現象がなぜ可能になったのかといった視点や、そもそも途上国においてスポーツがいかに振興されているのかといった動向について、ほとんど省みられることがなかったといえる。

本稿では、これまで棚上げにされてきた途上国におけるスポーツ振興政策の問題を南太平洋島嶼国圏域の事例から検討していきたいと思う。南太平洋島嶼地域に対してアジア開発銀行をはじめとする先進諸国による経済開発が行われてきたが、貿易依存度が高く、他律性の大きい基幹産業しかもたないこの地域特有の経済構造に起因して状況を好転できないままである。

佐藤(1997)が、島嶼国の問題群を近代世界システムという幅広いパースペクティブから捉えて、この地域における「ネーション」の問題性を論じているように、人口の流動性、国土空間の狭小性、根強いまでの伝統的な社会慣習や社会構造、文化的な差異は、国家による国土空間の再編をきわめて偏在的に展開させた。パプア・ニュー・ギニアのブーゲンビル島の独立闘争、2000年以降のソロモン諸島・ガダルカナル島の紛争やヴァヌアツ共和国の度重なる政権交代などにみられる過剰なまでの政治闘争は、近代的な国民国家(nation-state)の形成過程で、国家(state)

の創出が国民 (nation) の形成に先立って行われてしまったことの問題性をいみじくも露呈することになった。

長い歴史の中で培われた土着的な共同体を基盤とする空間と近代国民国家システムの中でいきなりあてがわれた政治領域としての空間が交錯しつつも、実質的には大きく乖離するなかで、それらをどのように整合させていくかということとは海洋島嶼国家の開発問題を考えていくうえでの大きな課題なのである。そうした課題を抱える地域において、開発という文脈と関連したところで、スポーツにはどのような可能性が見出され、活用されようとしているのか。

本論ではまず、近代国民国家形成とスポーツの関係が論じられてくるまでの系譜を整理したのち、スポーツ社会学と開発研究の座標の中に「開発問題とスポーツ」の関連性を検討する。そして南太平洋島嶼圏域、とりわけメラネシア地域における世界基準のサッカーの普及のプロセスを跡付けながら、そこから透かし見えてくる途上国のスポーツ振興の動向を特徴付けていく。本稿は、開発問題とスポーツとの接点を探りながら、「開発」という地平に見えてくるスポーツの新たな可能性について検討することを目的とする。

2. 近代国民国家形成の視角からと らえたスポーツの諸相

近代国民国家形成の視角からスポーツを捉えようとするとき、帝国主義段階の資本主義文化としてのスポーツの位置付けと、その文化装置としての機能を暴くことに焦点が置かれた古典的な研究がはじめに想起されるだろう。日本においても、スポーツは身体陶冶

(訓練) などを通した国民国家の再生産課題や国内、国外的ナショナリズムの醸成と結び付けられて語られることは少なくなかった。そこでは国家における政策行使やイデオロギー問題の範疇に焦点が置かれながら、一種の権力装置として機能してきたスポーツの姿が主要な論点とされた。

それに対し、80年代以降の研究は市民社会に存在する多様な権力やその様式の解明に、より焦点を置くようになる。とりわけ、これまでの権力研究の図式であった国家の一方的な権力の作動という観点を離れ、民衆の抵抗や回避、闘争を介した調整様式の問題として捉えられるようになってきている点に、この期以降の研究の特徴を見出すことができる。

スポーツ文化をこうした視点から分析することで、新たな視座を獲得してきた研究としては、イギリスでのスポーツと権力関係を民衆スポーツに軸をおいて考察した Hargreaves (1986) やファシズム体制による余暇時間の組織化に注目し、フィシズム体制を維持していくなかでスポーツが巧妙に機能していたことを明らかにしたグラツィア (1989)、スポーツが世界に伝播していく過程で何が起こってきたかを主題化した Guttman (1994) の研究などが挙げられる。また、日本においても、吉見の「運動会の思想—明治日本と祝祭文化—」が、明治期の運動会を素材に、その事象をめぐる多様な拮抗関係を巧みに捉えたものとして、同種の研究に位置付けられよう (吉見 1994)。いずれも、民衆のなかに権力作用が入ってきて、その接合部分に起こる軋轢や摩擦を見ていながら、全体社会の重層性を照らし出そうとしている点では共通している。従来の支配文化と従属的文化の関係を、「上から下への押しつけ」という一方的な作用と

して捉えず、従属的文化に属する側に、本来存在するもっと能動的な側面を見ていこうとする新たな潮流は、複雑かつ錯綜する多様な関係性の中で権力が作用していることを、民衆側と支配する側の拮抗関係という幅広い視角から捉え返していこうとする点で「現場で生じる機微」をより際立たせるものとなった。

このような視角は、グラムシのヘゲモニー論やカルチュラル・スタディーズとも重なりながら近年のスポーツ社会学研究の主軸をなしてきたが、一方でそうした視点からスポーツをみようとする、スポーツが錯綜する権力関係の中で担う可変性のもとに認識されるだけで、「開発問題に資するスポーツの可能性」といった視点が欠落してしまう恐れがある。途上国の問題へまなざしを向けるとき、ここでどうしても見据えておく必要があるのは、「近代スポーツは分裂をも誘発しうるし、対立を一層激化させ、社会機構を破壊しうるものでもあることを誰も疑わない。にもかかわらず、おそらく近代スポーツが国民を統合する力は、分断する力よりも強いであろう。」とした Guttman の主張や、「英国労働者階級を社会秩序に順応せしめる上で、スポーツがどの程度役割を果たしたのか」といった Hargreaves の関心に象徴される、国民統合の手段や地域社会の秩序を形成するものとして多様な役割を担ってきたというスポーツの位相である。一連の研究が明らかにしてきたのは、スポーツが紡ぐ人々の状況的な接合のあり方と同時に、「国民」意識の覚醒へと分かち難く結びつけられた身体教育の歴史的な展開や、余暇時間のスポーツを統制することで強固な社会統合を生み出すことに成功してきた先進諸国の政治力学的なスポーツの側面でもあったのである。

こうした「いかに社会統合を生み出すか」といった問題に対し、開発研究の領域に力点を置いてくると、近年、注目を集めている「ソーシャル・キャピタル」の視角とも折り重なってくることになる。ソーシャル・キャピタルとは、社会経済発展をもたらす人々の行動を促進するような制度、関係、価値、態度であり、それは人々と諸制度を繋ぐ社会における「糊 (glue)」のようなものであるとされている (World Bank 1998)。つまり、信頼や規範、ネットワークといった、目には見えないが成長や開発にとって有用な資源と考えられるもので、これを経済的資本と同様に計測可能かつ蓄積可能な「資本」として位置づけたものがソーシャル・キャピタルであり、最近では世界銀行や他の援助機関においても、この概念に対する関心が急激に高まってきている。

このソーシャル・キャピタルの議論に先鞭をつけた研究としては Putnam の *Making Democracy Work* (1993) が引例されることが多いが、その中で彼がソーシャル・キャピタルの強さに大きな関連性を見出した要素のひとつが他ならぬスポーツ、イタリア各地のサッカークラブの数であったということには注視しておかなければならないだろう。Putnam はその後、仲間とボウリングをする人たちよりも、ひとりでボウリングをする人々の増加にアメリカ社会におけるソーシャル・キャピタルの減退のひとつの典型的な例をみとり、それを“Bowling alone”という象徴的な言葉で表そうとしたりもしている (Putnam 1995)³⁾。アメリカ社会におけるこのソーシャル・キャピタル減退論は批判的なものも含めて様々な論議を巻き起こしているが、スポーツ組織やクラブがソーシャル・キャピタ

ルの蓄積に寄与するとの見方についてはおおよそ一致しており、そうしたスポーツの性向をもともと自明のものとしている点からも、この文脈におけるスポーツの活用可能性の一端を垣間見ることができるだろう。

このように、カルチュラル・スタディーズに依拠したスポーツ社会学研究の系譜や Putnam がソーシャル・キャピタルを論じはじめた経緯を視野に入れつつ、そうした考え方の縦糸を敷衍するとき、開発問題において平板にとらえられていたスポーツが、途上国の開発問題に対して大きな可能性をきりひらくことになる⁴⁾。民族的にも宗教的にも分散的で他にはほとんど何ひとつ共有できるものを持たない人々も、近代スポーツへの熱狂なら分かち合うことができるという途上国の現実を目の当たりにする時、我われの生きる近代国民国家体制にとって、スポーツは抜き差しならない重要な領域として立ち上がってくることになるのである。

スポーツにそうした地平が拓けてくるとき、我われはひとつの重要な問題を見落とすべきではないだろう。それは多様な差異を軽々と乗り越えて、まるで「人類の共通語」と呼べるかのように論じられるスポーツが、いかなる経緯において構築されてきたのかという問題である。ワールドカップのような世界規模の大会の開催が所与の形で捉えられ、そうしたスポーツイベントがそもそもなぜ可能なのかという初歩的な問いについて省みられることがほとんどない中で、途上国の現場を焦点化し、その背景を探ろうとする視点は、解題すべき問題としてとりわけ重要となるだろう。かかる問題認識のもと、ヴァヌアツで行われているサッカーがいかなる発展経路のなかで「世界」のサッカーと結びついているのかに

ついて素描しながら、「世界」のサッカーの定着のプロセスから見えてくる途上国のスポーツ振興の現状について考えていく。

3. 途上国で展開されるスポーツの開発援助：サッカーの世界基準はいかにして構築されるのか？

ガーナやコートジボワールなどのアフリカ勢、トリニダード・ドバコといった中南米の地域が、次々と FIFA ワールドカップ本大会への出場権を獲得し、「世界」への仲間入りを果たしていくなかで、これまで南太平洋地域のいずれの国も本大会に出場したことはなく、その道のりは未だ長い過程にある。しかしながら、この地域が「世界」と隔絶したところに位置しているのかというと、決してそうではない。南太平洋の国々においても公式とされる試合には世界大会と同様のルールが適用されるように、「世界」で展開されるフットボールと同様のフットボールがこの地域にも定着している。国際ルールの細則をはじめ、技術や戦術が変わるなかで、そうした変化はどのように現地に伝えられ、在地の人々はそれをどのように受容してきているのだろうか。サッカー不毛の地とされるオセアニア・南太平洋の地域の視角から捉えてみると、そこからどのような問題を読み取ることができるのだろうか。

3-1：国際的組織 FIFA の発展とサッカー振興計画

近代サッカーは英国でルールが統一され、19 世紀後半の大英帝国の拡大とともに、英国の貿易商人や技師、政府関係者などによって世界中に伝えられたことはよく知られている。

だが、この時代におけるサッカーの世界的な普及は、あくまで大英帝国の経済力と産業力の大きさに支えられたグローバル化という文脈の中で可能になったものであった。近代サッカーの唯一の統轄組織となった FIFA が、特別な振興計画を実施した結果としてサッカーを発展させてくるまでには、それから半世紀以上の歳月を要することになる。

FIFA によるサッカーの振興が積極的に意識化され、その発展に向けて実践が行われたのは、1960年代以降、スタンレー・ラウスがその会長職に就任した時期からである。ラウスは元審判員という自身の経歴から、世界におけるサッカーの発展には、審判員と指導者の資質向上が不可欠だと考えていた。彼は世界中でワークショップを開催し、ルールの解釈を標準化することに腐心するとともに、世界中のサッカーの向上を目的として技術委員会を設置し、科学的なトレーニング方法の普及に努めた。

その後、アベランジェの会長在任期に world development programme (1975-1978) が導入され、FIFA 主導によるサッカー振興が実践され始めた。サッカーの管理・運営、スポーツ医学、コーチ及び審判員の育成を目指したこのプログラムは、世界中で合計 74 回実施され、当時としては革新的なサッカー振興計画が開始された。このとき担当ディレクターとして招かれたのが、スイスのビジネスマンであった現 FIFA 会長の J. S. ブラッターである。ブラッターは振興計画の運営資金を FIFA の収入ではなく世界的飲料メーカーであるコカ・コーラ社に求め、計 350 万スイスフラン (1 スイスフラン=約 97 円として換算すると、約 3 億 3950 万円) の 5 分の 4 を負担させた。これを皮切りに FIFA によるサッ

カー振興計画は続々と展開され、世界のサッカーは、これらの振興計画を中心にルールが統一化され、世界的な標準化が図られていった (表 1)。

表 1・FIFA によるサッカー振興計画の世界的展開 (1975-2000)

1975 - 1978	world development programme	世界で合計 74 回実施
1980 - 1982	International Academy (I)	世界で合計 16 回実施
1984 - 1986	International Academy (II)	世界で合計 16 回実施
1987 - 1990	World Youth Academy	世界で合計 87 回実施
1991 - 1997	Futuro (I)	世界で合計 136 回実施
1997 - 2000	Futuro (II)	世界で合計 110 回実施

(出所：FIFA (2004) p. 156 より)

プロリーグが 50 カ国以上に存在する現在、国際的な移籍の大幅な増加を背景に、サッカー選手の国際市場の管理と国際試合の管理において、その一貫性とルールの維持が FIFA の主要な役割となってきている。それらに加えて途上国のサッカー機構を FIFA の援助によって確立しようとすることは、世界のサッカーを FIFA を中心に構築するための積極的な戦略であったと考えられよう。

そして現在、Goal programme が 1999 年から展開されてきている。このプログラムは、J.S. ブラッターの掲げる新しい構想として 1 億スイスフラン (約 97 億円) を基金に開始された。Goal programme を専門的にマネジメントする Development office が各大陸の連盟ごとに設置され、その指導の下に世界各地で若手選手の強化・育成のためのアカデ

ミーや競技場の開設、近代的な組織運営へ向けての資金援助など、大規模な援助を展開しながら、最終的には各協会が自立できるようになることを目標にしている。現地のニーズに即した振興計画を各協会自身にデザインさせ（FIFAはそれを「テラーメイド」と表現する。）、そのテラーメイドな計画に対し資金援助を行うという点で、従来の振興プログラムとは大きく異なる。現地のニーズを包括的に捉えながら、世界各地へ向け大規模に展開されてきていることからすると、「サッカー版 ODA」が FIFA によって本格的に始動されたと言ってもよいであろう⁵⁾。

3-2. FIFA が展開する大規模な援助

ヴァヌアツは、人口およそ 20 万人、約 80 の島々が南北 1300 キロにわたり連なる総面積 1 万 2190km² の群島国家である。首都はポートヴィラで、基幹産業として海産物加工業、観光業があるが、市場規模はきわめて小さく、先進国からの援助によって国家機構を存立させている。1980 年の独立までは英仏共同統治領ニュー・ヘブリデス（New Hebrides）として知られ、英語と仏語が現在でも公用語に採用されているように、独立後も旧宗主国の影響は色濃く残っている。サッカーの普及に大きく貢献してきたイギリスやフランスの影響もあり、ラグビーが盛んなオセアニア地区において、ヴァヌアツではラグビーよりもサッカーの人气が高く、新聞やラジオでもサッカーの話題が多くを占める。とりわけフランス・サッカーとの結びつきは強く、1964 年にはフランス系の市民を中心にニュー・ヘブリデス・サッカー・リーグが結成され、1974 年から 1979 年まで在地のクラブがフランスカップに参加するなど、長らく

フランス・サッカー協会の強い影響下にあった。独立後、それらの組織はヴァヌアツ・サッカー協会「Vanuatu Football Federation（以下 VFF と表記）」として受け継がれ、FIFA には 1988 年に加盟した。ワールドカップの予選には 1991 年に初めて参戦し、以降、これまでのワールドカップの予選にはすべて参加してきている。

ヴァヌアツでは Goal programme を通じて、天然芝ピッチ 4 面、クリニックやフィットネスセンター、全寮制の学校を併設するサッカー・アカデミーの建設が 2001 年に計画された（図 1）。この計画では、Goal programme の導入によって、①選手の質の向上、②国際的認知度の向上、③犯罪抑制へ繋がる健全な青少年育成、④教育への貢献のような効果が期待され、サッカーの水準の向上とともに、2005 年までに少なくとも二人の選手の海外移籍を実現し、2010 年に向けてヴァヌアツの国際的な認知度を向上させることが目標とされた。実際、これらの計画は建設用地の取得問題や財務担当となった海外のコンサルタントによる横領疑惑などが浮上するなかで、当初の構想通りには進展していないが、海外か

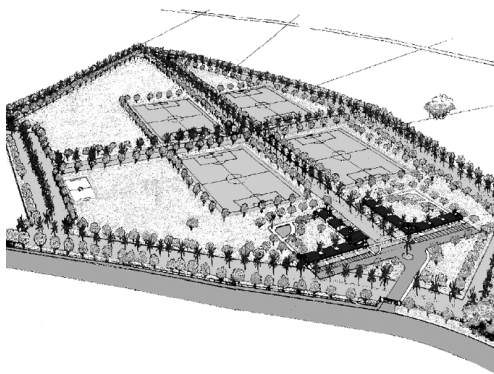


図 1 (2001 年 9 月時点での完成予定図)

ら経験豊富な指導者が招聘され、彼を支えるナショナル・チーム専任のスタッフが配置されるなど、サッカーレベルの向上へ向けて体制が急速に整備されることとなった⁶⁾。また、VFFのオフィスが2階建ての専用オフィスへと移転し、協会専用の公用車の使用が可能になるなど、現地の各スポーツ団体の中で、その規模は群を抜く存在となった。

とくに FIFA ではブラッターが会長に就任して以降、莫大な放映権料からの収益を背景に財政援助による各国協会への体制強化やサッカー環境の地域格差の是正への気運が盛り上がり、Goal programme と平行して「FIFA Financial Assistance Programme (以下 FAP と表記)」が進められるなど、途上国に対する援助活動が急速に強められた。FAP では、女子サッカーやフットサル、審判部や医科学部といった部門を協会組織のなかに設置し、より効率的な運営体制を構築することを目的に、各国への資金援助が行われている。ヴァヌアツでもこのような援助のもと、トップ・レベルの選手を輩出すべく、サッカーを振興する体制を強化するために、「VISION VANUATU 2003-2006」が2003年から開始された。「VISION VANUATU 2003-2006」には、FIFA の目指すディベロップメントの方向性が色濃く反映され、そこには今後の目指すべきサッカーのありようが明確に打ち出されている。では FIFA の目指す世界基準とはいかなるものなのか。その内容については一部の関係者を除いてあまり知られていないが、次では「VISION VANUATU 2003-2006」をもとに、これまであまり検証されてこなかった FIFA の推進する世界基準の内容について描き出していると思う。

3-3. FIFA の志向する世界基準：「VISION VANUATU 2003-2006」のケースから

FIFA はサッカー振興の方向を「試合に関連して必要とされる要素 (Needs of the game)」と「協会運営に関連して必要とされる要素 (Functional needs)」の側面から捉え、開発すべき要素として措定する。さらに「試合に関連して必要とされる要素」については、①ユース世代の育成、②男子競技、③女子競技、④技術的な向上、⑤審判、⑥医学、⑦フットサル・ビーチサッカーの7つのカテゴリーに細分化され、「協会運営に関連して必要とされる要素」については、①プランニング/アドミニストレーション、②イベント/マネジメント、③マーケティング/メディア、④インフラストラクチャー、⑤その他の5つに分類される。それぞれのカテゴリーが「トップ・レベル」「アドバンスト」「ベーシック」「ノン・エグジスティング」のいずれかで評価され、ヴァヌアツのサッカーを世界基準であるトップ・レベルへ少しでも近付けようとする。以上の関係は表2に示した体系図の中に捉えられる。それぞれのカテゴリーにお

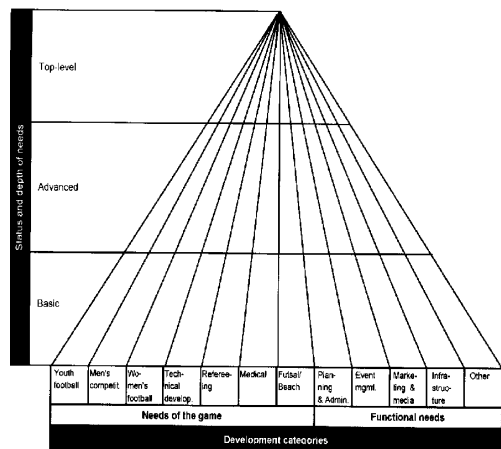


表 2

ける具体的な評価項目とヴァヌアツのサッカー環境に対する FIFA の評価は次の通りである。

「試合に関連して必要とされる要素 (Needs of the game)」の評価項目

①ユース世代の育成 (Youth football: boys and girls)	
全体的傾向 (Overall criteria)	評価
ユース世代におけるサッカー人気の程度は？	トップ・レベル
ユース世代の女子サッカーに対する人気の程度は？	アドバンスド
協会の運営面について	評価
ユース世代のリーグ戦や大会の数	アドバンスド
ユース世代の登録選手数	ベーシック
ユース世代チームに対して特別な取り組みをしているクラブ数	ノン・エグジスティンク
国内トップリーグでユース世代チームを組織しているクラブ数	アドバンスド
ユース世代チームの振興や組織化に対して特別な資源となるものはあるのか？	アドバンスド
ユース世代の代表チームによる海外大会への参加頻度	アドバンスド
資格をもった指導者の数	ベーシック
学校におけるサッカーの状況について	評価
政府や教育機関によるサッカーへの支援状況	ベーシック
学校とサッカー協会の連携の程度	トップ・レベル
インフォーマルなサッカーについて	評価
ストリートサッカーなどのインフォーマルなサッカーの人気	トップ・レベル
競技施設やサッカー用具の活用程度	ベーシック

②男子競技 (Men's competitions)	
国内大会	評価
リーグ戦や大会の数	アドバンス
クラブ数	アドバンス
登録選手の数	アドバンス
リーグは技術レベルにあわせてそれぞれに構成されているか？	ベーシック
移籍やドーピング、罰則等に関する規則は確立されているか？	アドバンス
国家で定められた暦が尊重されているか？	ベーシック
国際的領域	評価
国際大会への参加頻度	アドバンスド
海外移籍に関する協会内の体制づくり	ベーシック
海外でプレーする選手の把握	トップ・レベル
代表の試合日程は世界の標準的な日程と同調しているか？	ベーシック

③女子競技 (Women's football)	
全体的傾向 (Overall criteria)	評価
女子サッカーの人気	アドバンスド
協会の運営面について	評価
女子リーグの数	ベーシック
登録されている女子選手数	ベーシック
女子チームに対して特別な取り組みをしているクラブ数	ノン・エグジスティンク
女子サッカーの振興や組織化に対して特別な資源となるものはあるのか？	ノン・エグジスティンク
女子代表チームの大会への参加頻度	ベーシック
資格をもった指導者の数	ノン・エグジスティンク
女性指導者のレベル	ノン・エグジスティンク

④技術的な向上 (Technical development)	
コーチング	評価
指導者の数	アドバンスド
指導者のレベル	ベーシック
指導領域が専門分化されているか？	ベーシック
指導者資格制度の確立	ベーシック
専任のスタッフの存在	アドバンスド
協会の活動	評価
協会内における技術委員の存在	ベーシック
協会独自で技術研修の機会を設けているか？	アドバンスド
指導者養成システムの確立	アドバンスド
国際的な研修機会への参加頻度	ベーシック

⑥医学 (Medical)	
国内の医療水準	評価
スポーツ医学関係者の数	ベーシック
使用可能な医療機器の水準	ベーシック
サッカーに起因する傷病への国内医療機関の対応力	ベーシック
協会の活動	評価
使用可能な医療機器の水準	ベーシック
ドーピング問題への対応	ベーシック
スポーツ医学に関する研修機会	ベーシック
代表チームやクラブに対する定期的な健康診断の機会	ベーシック
試合中の受傷に対する支援体制	ベーシック

⑤審判 (Refereeing)	
審判員	評価
審判員の数	アドバンスド
審判員のレベル	ベーシック
女性審判員の数	ベーシック
協会の活動	評価
協会内における技術指導員の存在	ベーシック
協会独自で技術研修の機会を設けているか？	アドバンスド
審判員養成システムの確立	ノン・エグジスティング
審判活動に対する支援の有無	ベーシック

⑦フットサル・ビーチサッカー (Futsal-Beach)	
大会	評価
フットサル・ビーチサッカーのリーグ戦や大会の数	ベーシック
チームやクラブの数	ベーシック
登録されている選手数	アドバンスド
代表チームやクラブによる海外大会への参加頻度	ベーシック
インフラストラクチャー	評価
フットサル・ビーチサッカー用の施設の有無	ベーシック
使用可能な用具の有無	ベーシック
協会の活動	評価
専任のスタッフの存在	ベーシック

「協会運営に関連して必要とされる要素」
(Function needs)

① プランニング / アドミニストレーション (Planning & administration)	
組織	評価
協会事務局の有無	アドバンスド
協会事務局の施設所有権の有無	トップ・レベル
専門化された部局の存在と職員の雇用形態	アドバンスド
職員の充足情況	アドバンスド
職員に対する人事権	トップ・レベル
ビジネスプランと財務	評価
ビジネスプランの有無	アドバンスド
財務計画の妥当性	アドバンスド
協会の経済的自立の程度	ノン・エグジ スティング
会計検査の頻度	トップ・レベル
マネジメント関連	評価
渉外に関する経験・知識	ベーシック
政府やスポンサーとの連携情況	ベーシック

③ マーケティング / メディア (Marketing & media)	
組織	評価
協会内におけるマーケティング部門の有無	ベーシック
メディア関連部局の有無	アドバンスド
収入源	評価
放映権料による収入の有無	ノン・エグジ スティング
サッカーのメディアへの露出度	トップ・レベル
スポンサーからの収入	ベーシック
資格付与からの収入	ノン・エグジ スティング
タバコ産業や酒関連スポンサーへの依存度	トップ・レベル
外部機関との対応	評価
多様な媒体を活用した広報活動の有無	ベーシック
メディア機関との距離	ベーシック

② イベント / マネジメント (Event planning and management)	
組織	評価
大会運営に関する人材確保	ベーシック
国際大会を開催できる要件を充たしているか？	アドバンスド
安全性	評価
FIFA の定めた安全基準を充たしているか？	ベーシック
試合日程	評価
国内のリーグ戦や大会は、国際試合の日程を考慮して組まれているか？	ベーシック

④インフラストラクチャー (Infrastructure)	
オーナーシップ	評価
競技場や運営事務局など専用施設の有無	ベーシック
競技場や運営事務局などの施設を占有できる頻度	ベーシック
数と普及状況	評価
インフラストラクチャー(練習場や競技場など)の整備状況	ベーシック
地域による整備状況の格差の有無	ベーシック
インフラストラクチャーの整備状況	評価
インフラストラクチャーの整備状況	アドバンسد
メンテナンスに要する経費の確保	ベーシック
インフラストラクチャーの活用状況	評価
インフラストラクチャーの活用計画の有無	ベーシック

⑤その他 (Other)
「VISION VANUATU 2003-2006」においては、記載されているものはない。

3-4. FIFAの推進するサッカー振興計画の現地への影響

以上から、FIFAによって途上国で推進される「世界基準」の輪郭を明らかにすることができるだろう。上記のような評価基準をもとに、重点すべき領域や予算が検討され、サッカー振興計画としてのマスタープランが策定されることになる。例えば「VISION VANUATU 2003-2006」では、ユース世代の指導者不足が指摘され、その対策として、ユース世代の指導者を都市部だけでなく農村部にも配

置する計画が必要であるとし、国内各地でユース世代を育成することが提唱された。実際、この提言を皮切りにヴァヌアツ・サッカーの将来を支える青少年サッカーの普及体制作りへ向け、その底辺を広げる組織的取り組みが始まった。小学校を巡回指導する「Vanuakids」プログラムが導入され、首都のポートヴィラを中心にVFFスタッフによる子どもたちを対象にしたサッカー振興が目指され本格的に実践され始めたのもこの時期からである。また、協会組織の中にマーケティング部門や広報部門、スポーツ医学部門が新たに組織化され、より効率的な協会運営へ向けてIT化が進展するなど、合理的な体制の整備に向けて大きな組織改革が行われた。これらの結果、VFFは運営体制において急速な成長を遂げることとなった⁷⁾。

このように、Goal programme や FAP では、これまで世界のひのき舞台とは無縁のところへ位置してきたヴァヌアツのような国々に対し、従来の受動的な立場、すなわち FIFA によって一方的なワークショップが提供されるという立場から、「テラーメイド」で振興計画を立案し、自らフットボールを発展させていく能動的な立場への転換といったものが前面に押し出されてきた。ただ、能動的な色彩が強められたとはいえ、ヴァヌアツのフットボールの発展の方向性は、最終的に世界基準に近づき、その仲間入りを目指すという確固たるベクトルによって貫かれ、FIFA が推進するフットボールの輪郭をトレースするよう、あらかじめ決められている。振興計画においては「犯罪抑制へ繋がる健全な青少年育成」や「教育への貢献」といったスポーツ振興の枠組みにとどまらないヴァヌアツの抱える教育問題全体に対する効果が掲げられ、

その中で子どもたちへのサッカー指導の実践は、学校教育の機能を補完する場として社会的にも承認されながら、健全な青少年育成の活動の一環としても、その重要性を高めていくことになった。だがまた一方で、「選手のレベルアップ」を強く要請され、代表チームを強化することが、最終的にヴァヌアツの国際的認知度の向上に繋がるとされた。しかもその実現には FIFA の推し進める世界基準を積極的に取り入れることが必要との認識が培われ、それはスポーツ発の国威発揚の装置としても利用されていくことになったのである。

勿論、国際大会での活躍がヴァヌアツの認知度を高めるという認識は、以前から広く潜在的に形成されていたが、近代的な設備を有するフットボール・アカデミーの建設計画や選手の海外移籍の目標など、具体性を伴った発展の経路が潤沢な資金援助に裏打ちされて示されたことが、多くの人々により強い説得力をもって訴えかけた。「フットボールの振興」という目標のもと、選手の競技力を向上させ、国際的なフットボール市場に近接していくことが、ヴァヌアツの国際的な認知度を高める道筋として示されたことで、Goal programme や FAP を通じて振興されるサッカーは、ヴァヌアツ人にとって多義的な意味を含ませた表象となっていったのである。

4. スポーツによる途上国と「世界」との接合：FIFA が推進するサッカーの受容

以上より見て取れるのは、スポーツは「人類の共通語」であるという意見に対して、ワールドカップのなかで繰り広げられるようなサッカーは自然成長的なものではなく、

FIFA からの要請として、人為的・画一的に「計画された」制度的制度の中で共通語として確立されてきたという歴史的事実である。

FIFA によって様々な振興計画が実施され、振興されたところに現代のサッカーのひとつの特徴があり、世界中のサッカーは FIFA が規定した何重もの役割規定のネットワークの中にしっかりと組み込まれ、標準化されている。そのことは必然的に、すべてのサッカー協会が FIFA の内部でつくられた価値観やその文化に基づいたルールに従うことを意味し、だからこそ、あらゆる国や地域で世界的に標準化されたサッカーが展開され、ゆえに世界中を巻き込んだワールドカップの開催が可能となっている。

しかしながら、このような振興計画が到来しても、ヴァヌアツのサッカー全体が一挙に刷新されることはない。VFF のスタッフによる精力的な活動は、国内のサッカーを振興するのに貢献しているものの、それらは在地で普及される際、同じサッカーとはいっても規則や戦略、戦術によって規律を張りめぐらされた高度なかたちで展開される世界レベルのサッカーとは様相が異なる、現地特有のサッカーと縫合されることになる。

多くのヴァヌアツ人からすれば、サッカーは奨励されてきたものではなく自然に行われてきたものであり、彼らにとってそれはあくまでも仲間内の活動の枠組みにすぎず、FIFA の思惑とは関係のない日々の生活に埋め込まれたところから行われているのである。実際、振興する側からみれば、サッカーは日常生活とかけ離れた壮大な目標に向けて構造化され共時化される時空であるが、受容する側からみれば、それは日々の生活の遊びそのものなのであり、FIFA の推進するサッカーに一

時的な影響を受けたとしても、それによってすべてが置き換えられてしまうようなことはない。

こうした差異において、しばしば現地の人々の間で語られるのが、「ディシプリン (discipline)」という言葉である。ディシプリンとは、明確なイニシアチブの所在において一種の体系性をもつ様式によって秩序づけられ、ある程度統制のとれた集団行動を包括的に指し示したものであるが、そうした集団行動を不得手とする心性をなかば自虐的に捉えるとき、ヴァヌアツ人がよく用いる言葉である。とりわけ競技成績が低調のときなどは、その原因をディシプリンの欠如に求める傾向が強く、現地では、「強固なディシプリン (strong discipline) が確立されなければならない」といった類の言葉をしばしば耳にする。そうした言葉はクラブレベル、代表チームレベルを問わず選手や指導者からも頻繁に語られ、サッカーのみならずヴァヌアツのスポーツ界全体を強化していくためのキーワードのひとつとして広く共有されている。だが、その重要性が周知されている状況とは対照的に、ディシプリンで統制されたサッカーよりも、おおそそれとはかけ離れた彼らなりのサッカーの仕方が大抵の場合において優先される。

例えば、実際、大会を目前に控えた時期には、チーム内にディシプリンを重視する空気が高まり、選手たちはかなり厳しい練習にも熱心に取り組むものの、大会が終了した途端に練習への真剣度や参加率は低下し、場合によっては酒やタバコに興じる者も出てくるなど、大会前に盛り上がりをもせたディシプリンに対する気概が一気に溶融してしまう事例は少なくない。Goal programme によるサッカー・アカデミーが様々な誘惑から逃れられ

る場所に全寮制のアカデミーとして計画されるのも、選手たちをディシプリンによって統制することを可能にするためであり、そのことはアカデミー運営に関わる関係者が一様に認めている。このようにヴァヌアツでは、ディシプリンの重要性が強調され、その重要性については幅広く認識されながらも、一方で共通の目標に向かって統制のとれた強制的集団行動が敬遠される事態が生じるなど、状況に応じてそれとの間の距離はせばまりもすれば広がりもする⁸⁾。

また選手によっては、国際大会の意味を FIFA の志向する方向性から微妙にずらし、読みかえる局面もみられる。国際大会に参加することは、単に世界レベルのサッカーに近づくためだけのものとして存在しない。国内の雇用情勢が停滞し、とくに安定した働き口をもたない者にとって代表チームの選手になることは、世界レベルのサッカーに近づく道程であると同時に、数少ない「豊かな暮らし」を実現するモデルとしてみなされている。

「VISION VANUATU 2003-2006」が開始されてから、数名の選手がオーストラリアをはじめとして活躍の舞台を海外へ移すことに成功したが、彼らの存在は現地の人々にとって少なからぬインパクトを与えることになった。どの選手もプロ契約までには至っていないものの、中にはヴァヌアツで暮らすなかでは決して得られぬ境遇を見事なまでに体現させた選手もいる。代表の有力選手として活躍してきた A は、帰国後、自家用車や不動産を取得するなど、ヴァヌアツ国内の収入水準からすると高額な報酬を海外で受けてきたことを周囲に実見させることになった⁹⁾。特別に誇れるような学歴もなく、海外でプレーする前はことさら恵まれた雇用環境にもなかった彼が、

サッカーで掴んだ財産を元手に自分でビジネスを興す姿は¹⁰⁾、代表チームの選手に選ばれることの意味を、ヴァヌアツ人の暮らしに引き寄せたところできわめて効果的に暗示したのである。それは南米やアフリカのサッカー選手が、欧州のビッグクラブで成功をおさめるというような遠い次元の話ではなく、紛れもなく自分たちの身近で起こった確かな手応えを感じることでできる等身大の事例として、ヴァヌアツ人の中に受け入れられることになった。

Aのような存在が、代表選手として国際大会に参加することの意味を違ったかたちで可視化させたことも後押しして、現在では、選考の最終段階の時期においてディシプリンを求められても、それに反発することなく、選手たちは一時的にでもFIFAの奨励するサッカーのかたちに適応していこうとする。このように、FIFAによって主導されるサッカーはディシプリンと相絡まって推進される傍ら、海外へ向けてみずからの存在を華々しく表現できる様々な機会と可能性を兼ね備えた魅力あるものとして捉えられ、彼らの抱える問題を部分的にでも超克する可能性を示唆しながら、既存の彼らの生活のシステムに合うように接合され、受け入れられている。

5. 途上国の現実とサッカーに託される夢：ヴァヌアツは「世界」といかに繋がるようとしているのか？

FIFAの側からみれば、Goal programmeやFAPでヴァヌアツのサッカーを変革し、「世界」へ繋げる道を積極的に探ろうとしているが、現地ではそれらに一気に取り込まれてしまうようなことはなく、現在のところ、大規

模な援助に対する反応の表出はVFFの規模の拡大を中心に偏在化しているにすぎない。つまり、FIFAが規定した何重もの役割規定のネットワークの中にしっかりと組み込まれ「世界」と繋がり始めようとしているのは、主にVFFとVFFが統轄する代表チームが中心で、そのインパクトは限定的な部分にとどまり、首都以外の地域や一般のサッカー関係者とのあいだには依然として温度差がある。また自国のニーズを強調するGoal programmeも、非西欧社会が時間の経過とともに進歩し、いつかは「西欧」になり、それが「世界」と繋がるということを前提にしているため、かねてより議論を呼んだ近代化論と同じ陥穽を伏在させる。現実的に、在地のマネジメント能力を超えかねないあまりに大規模な援助は、投入される資本をめぐり国内のサッカー界を混乱させ、地域間、団体間において新たな格差を生じさせるとともに、それがかえって相互の軋轢をうむ原因ともなっている¹¹⁾。

しかしながらこうした問題を抱えていたとしても、旧宗主国からの援助によって国家機構が保持され、ときに「寄生国家」と称される自国の存立構造から比べると、近代国民国家体制の中ではなかなか主人公になれないヴァヌアツ人たちにとって、FIFAの推進するサッカーは、確かな目的に向かって物語の主人公となることのできる可能性を呈示してくれる。Goal programmeで有能なタレントを育成し、将来的にはサッカーの国際市場に進出することを目指しながら、ナショナル・アイデンティティを積極的に表明する有力な手段としてサッカーが期待を集めているのも、おそらくこうした状況と無関係とはいえないだろう。

現代の国民国家体制において、「先進国から島嶼国へ」という一方向に固定化されたベクトルの中に生きる人々にとって¹²⁾、サッカーは「島嶼国から先進国へ」という新たなベクトルを創造してくれる数少ない「夢」を託せるものとして存在する。少なくとも、国家官僚や銀行員を離職してまで VFF の活動に携わろうとする関係者たちにとって、サッカーはそうした存在として捉えられ、自分たちの置かれた状況を転換しうる契機として熱いまなごしを向けられている。周辺国による中核国への恒常的な依存といった島嶼国が直面してきた状況からすれば、荒唐無稽に思われるそうしたベクトルの逆転も、Goal programme や FAP といった「FIFA からの本格的な支援」という文脈におかれることによって、にわかには実現可能な様相を帯びてくる。

このように VFF は、「VISION VANUATU 2003-2006」に描かれたサッカーの発展に象徴されるシナリオの中で、世界のサッカーを底辺で支えている重要な拠点として FIFA の権力体系に包摂されながら、現代サッカーに求められる新たな外部の要素を組み入れつつ再編されてきている。

6. むすびにかえて：開発のコンテキストに浮かび上がるスポーツの可能性

途上国におけるスポーツ振興政策にはどのような特徴があるのだろうか。ヴァヌアツの事例から明らかになったことは、途上国のスポーツを振興するのに積極的な役割を果たしているのは政府組織よりも IOC や国際競技連盟 (International Federations: 以下 IF と表記) であり、そうした国際的なスポーツ機関が、

当該国のスポーツ団体へ直接的に支援を行いながら現地のスポーツが振興されてきているということである。

このことはヴァヌアツに限らず、南太平洋地域全体をみても同様である。もちろん政府のスポーツ関係部局もスポーツ振興の一翼を担っているが、いずれの政府も慢性的に財政が困窮している状況にあることから、実際には、外部からの援助で比較的潤沢な運営資金を有する各競技団体 (National Federation) やオリンピック委員会 (National Olympic Committee) がスポーツ振興の中心となる。例えば、スポーツ施設の整備など大規模な設備投資は、海外からの援助によって行われることが多く、指導者養成へ向けた講習会の開催や国際大会への参加を目指す選手の強化費なども、そうした援助に依存する部分が圧倒的に大きい。南太平洋地域においては、国家としての明確なスポーツ政策が存在しないなかで、IOC や各 IF からの援助が、スポーツ振興の推進力になっていることが大きな特徴となる¹³⁾。

こうした背景には、国家として特別にスポーツ政策を展開せずとも、実際に人々のあいだで草の根的にスポーツ活動が実践されているという現実と、外部機関からの援助で制約されたスポーツ環境が改善されてきているという事実がある。そして何よりも、スポーツは個人の領域に属する余暇活動のひとつであるとの一般的な認識が、スポーツを政策の遡上から遠ざけてきたともいえるのである。もっともそうした認識は、多くの先進諸国においても珍しいことではなく、スポーツ政策の先進地とされるイギリスでさえも、スポーツが政策の遡上にあがってきたのは近年のことであるから、途上国でスポーツ政策が重要視されていない現状は、決して特別なことで

はない¹⁴⁾。

しかしながらその一方で、政策領域の周縁に押し留めることのできないスポーツのもつ様々な可能性を我われは看過すべきではないだろう。ヴァヌアツでのサッカーが、学校教育を補完する場として機能しながら、自分たちの身近で起こった「豊かな暮らし」を実現するひとつのモデルを提供していたように、スポーツには余暇活動の領域のみに集約できない様々な可能性がある。雇用情勢が不安定で、かつ将来的にも楽観できない島嶼国の状況において、青少年世代をいかにして社会の中へ受容していくのかという太平洋諸国の抱える問題に対するスポーツのポテンシャルや、伝統的な権力という媒介項の欠如と伝統的な単位集団の規模が小さいことに起因する国家統合の契機の脆弱さに対して国民を凝集させるちからなど、途上国の抱える深刻な問題にスポーツが貢献できる領域は、健康の保持増進や余暇活動の充実といったコンテクストの中だけで捉えられるものでは決してない。自由な空間であるスポーツの場が、IOCやIFの援助によってそれらの統轄のもとに成り立つ「自由」な空間へと組み替えられていくことの是非については周到に検討される必要があるものの¹⁵⁾、差異をもととせず人々を凝集できてしまうスポーツの力学的な側面は、開発問題とスポーツの接点をこれまでとは別なかたちで結び付けていく可能性を大きく切りひらく。本稿の事例でみれば、国際大会という回路を通じて世界と対峙していくなかで、現地の人々は「ヴァヌアツ人」としての存在を相対的に感じざるをえないプロセスの中に投げ込まれ、一時的にはあるにせよ、既存の枠組みを超えたフレームワークに自分を帰属させることになる。「国民意識の創生」に苦

慮しているヴァヌアツにおいて、ヴァヌアツ人というフレームワークの創出に、サッカーが鮮明なかたちでこたえる瞬間がそこにはある。

そうしたモメントは、現在、まさに「国民の創出」が大きな課題となっている南太平洋諸国において、重要な視点のひとつを提供してくれるように思う。これまでの近代国民国家形成の過程においてスポーツや身体教育の果たした役割を整理しながら、「国家の有様」を模索する南太平洋の国々の development とスポーツの可能性が結び付けられて検討されるとき、スポーツという領域が大きな政策課題として捉えられ、途上国でスポーツを振興することの政策的意義に関する議論が新しい次元で沸き起こってくることだろう。

謝 辞

本研究は部分的に文部科学省科学研究費若手研究(B)研究課題番号「16700452」、研究課題名「貧困削減に向けたソーシャル・キャピタルとしてのスポーツの活用可能性に関する研究」と中央大学特定課題研究「スポーツを通じた国際協力の可能性に関する研究」の補助を受けた。記して謝意を表する。

注

- 1) 本稿は、小林勉、2006「南太平洋の島から『世界』へ：FIFAサッカー振興計画の展開と受容」季刊民族学 117 (国立民族学博物館協力)：46-51。をもとに、詳細なデータを加筆し、本稿の課題に即して大幅な修正を施したものである。
- 2) 齊藤(2001)は、中近東6カ国のうち、シリア、ジョルダン、エジプトを調査対象国として各国のスポーツ教育行政制度について調査しな

がら、中東諸国における身体教育の特質と国際協力のあり方に関する研究を展開している。しかしながらそこでは、どのような身体教育指導者が養成されようとしているのか、また、学校外での身体活動、女性の身体活動はどのような状況であるのか、体位・体力の状態及び身体運動への意識はどのようであるかなどといった点が焦点化され、当該諸国においてスポーツを振興していくことの政策的な意義については健康問題や教育問題の枠組みの中で援用されるにとどまっている。

3) 1980年～1993年の間に、アメリカのボウリングの総人口は10パーセント増加した一方で、仲間内でのボウリングは40パーセント減少したという。パトナムは「このボウリングの数字が些細なものか?」と問いかけながら、1993年の1年間に少なくとも一回プレーした人は約8000万人であり、これは1994年の連邦議会議員選挙で投票した人数より3分の1多く、定期的に教会へ行くという人口とほぼ同様の数字であるという事実に着目する。こうした傾向はボウリング場の経営者にとっては経営的にかなりの痛手となっているという。なぜなら、彼らにとって大きな収入源は、貸しボウルや貸し靴よりも、むしろビールやピザの売り上げであり、仲間とボウリングをする人たちは、ひとりでボウリングをする人たちの3倍も多くビールやピザを消費するが、一人でボウリングをする人が増加しているということは、そうした消費活動が停滞するということの意味するからである。しかし、そこに見出せるもっとも重要な社会的意味は、ボウリング場での社会的交流であり、ビールを飲みピザを食べながら行われる市民的な会話であって、これはひとりぼっちのボウラーには失われており、そうした事態をパトナムは問題視する。彼はこのようなひとりでボウラーの増加にアメリカ社会におけるソーシャル・キャピタルの減退のひとつの象徴的な例をみることができると言い、その後、“Bowling alone”はその懸念を表す象徴的な言葉となった。

4) ここまで取り上げたもの以外にも、フーリガニズム以降のカルチュラル・スタディーズにおけるサッカー研究など、特に労働者階級のファンたちが文化的アイデンティティを構築するときの媒介としてサッカーを捉えてきたレスター派などに代表される重要な流れももちろん存在するが、とりあえずここでは、本稿の課題に即し

たところで重要な貢献者を何人か取り上げることで整理することにした。なお、レスター派による研究の動向の詳細については、有元(2003)を参照のこと。

- 5) 2007年3月時点で189の協会がGoal programmeの援助を受けている。
- 6) もちろん、それまでもU-20やU-17など、各世代ごとに代表チームのスタッフが配置されていたが、彼らはすべてヴァヌアツ人であり、しかもボランティア・ベースでその役割を担っていた。Goal programmeによって顕著となったのは、そうしたスタッフがVFFの専任職員の身分となり、有給となったことである。
- 7) 勿論このほかにもオリンピック委員会を中心に開催されるオリンピック・ソリダリティ・コースをはじめとする多様なスポーツ振興プログラムがヴァヌアツでは展開されている。しかしながら、そうしたプログラムの多くが短期間の研修機会を提供する形態をとっているのに対して、FIFAからの援助はヴァヌアツ人の雇用機会を創出しているなど、現地に与えているインパクトは決して小さくなく、他のプログラムと大きく一線を画すものとなっている。
- 8) この典型的な例は、海外から招聘された代表監督に対するヴァヌアツ選手の評価だろう。競技レベルを向上させてくれた彼の功績に一定の評価を与えながらも、明確なイニシアチブのもと、ときに選手を厳しく叱責しながら管理しようとする外国人コーチの姿勢に対して、否定的な意見を持つ選手は少なくない。中には彼の体制においては代表選手としてプレーするのをはばかる選手もいる。
- 9) Aは、2004年から2005年までの2年間、オーストラリアのブリスベン・プレミアリーグの強豪クラブに在籍していた。クラブからは、週給500オーストラリアドルを支給されていたという。(2006年2月26日に実施した、A本人に対する直接ヒアリングによる。)
- 10) 巨額の契約金の伴うプロ契約には至らなくとも、海外のクラブに在籍しているあいだは、現地の滞在費を含めてヴァヌアツの平均的収入より、はるかに高い水準の報酬を得ることが可能となる。
- 11) 先述のGoal programmeの財務を委託された海外コンサルタントの横領問題をはじめ、FIFAからの援助金に関する不透明な流れに対しては、多くのヴァヌアツ人から疑惑の目を向けられてきている。実際、FIFAからの潤沢な援助が開始

されて以降、VFF 内部のポジションや協会運営のあり方をめぐって「協会とリーグ」「都市部と農村部」といった間で軋轢が生じるなど、政治的な抗争が一方で顕在化し、それらの対立は度々ラジオや新聞などで報道されてきている。

- 12) 南太平洋についていえば、伸び悩む南太平洋島嶼国の経済事情と行き詰まる島嶼国の経済開発の姿が浮き彫りとなってくる。洋島に暮らす人々が先進国並の消費生活や現金生活を始めるのであれば、生産財の獲得に遠隔島嶼ゆへの輸送費が加わり、追加費用の負担という宿命がつきまとう。そうすると先進国国民以上の現金収入の道が必要となるが、現在の経済事情では困難なことから、いきおいそれは経済援助の方向へ向かうことになる。United Nations (1992) が、この地域の抱える問題群として示したのも、貿易依存度が高く、市場規模が狭小ゆえに輸出代替工業化には限界があるという島嶼国の insularity という問題であった。
- 13) また、こうした援助に加えて、近年、オーストラリア政府による支援も急速に拡大してきている。とくに1994年以降、オーストラリア政府は太平洋諸島フォーラム (Pacific Island Forum) に加盟する14の太平洋諸国に対して、草の根からエリートレベルに至るまで総合的なスポーツ振興計画であるオーストラリア・南太平洋スポーツプログラム (Australia-South Pacific Sports Program) を実施してきている。このプログラムは、当時、シドニー・オリンピックの開催を控えて、島嶼国のアスリートたちの競技レベルを向上し、島嶼地域からより多くのアスリートを本大会に参加させ、「史上最多の参加国数によるオリンピックの開催」という開催側の意図もあって始められたが、同時にエリートレベルのスポーツに限らず、ジュニアや草の根レベルのスポーツも対象に新たなプログラムが導入されるなど、島嶼国の限定されたスポーツ環境に対する総合的な支援策として展開されてきている。このように、多様なアクターによって、スポーツ振興の道筋が同時に複数存在するということが、スポーツ振興の大きな特徴となる。
- 14) スポーツが政策の対象となる優先度としては低くならざるをえないとの一般的な認識について、イギリスのスポーツ政策の事例から解題したものとすれば、Houlihan and White (2002) の研究が挙げられる。
- 15) この問題については、小林 (2000) を参照の

こと。

参考文献

- 有元健. 2003「サッカーと集合的アイデンティティの構築について」『スポーツ社会学研究』第11巻: 33-45.
- Barrie Houlihan and Anita White. 2002 *The Politics of Sports Development: Development of Sport or Development through Sport?* Routledge: London and New York.
- FIFA, 2004『フットボールの歴史』小倉純二ほか訳, 講談社.
- グラツィア, ヴィクトリア. 1989『柔らかいファッション』豊下梢彦他訳, 有斐閣.
- Guttman, Allen. 1994 *Games & empires: Modern sports and cultural imperialism*. Columbia University Press: New York. (1997『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』谷川稔ほか訳, 昭和堂.)
- Hargreaves, John. 1993『スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴史社会学—』佐伯聰夫・阿部生雄訳 不味堂. (1986 *Sport, power, and culture: a social and historical analysis of popular sports in Britain*. St Martin's Press: New York.)
- Harvey Jean and Houle François. 1994 *Sport, world economy, global culture, and new social movements*. *Sociology of Sport Journal* 11: 337-355.
- 小林勉. 2000「開発戦略としてのスポーツの新たな視点: 『正統性』をめぐる組織と『現場』の問題」『体育学研究』45/6, 129-140.
- Lever, Janet. 1996『サッカー狂の社会学—ブラジルの社会とスポーツ—』亀山佳明ほか訳, 世界思想社. (1983 *Soccer Madness*. The university of Chicago Press: Chicago.)
- Putnam, Robert D., with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti. 1993 *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press. (2001『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳 NTT出版.)
- Putnam, Robert D. 1995 *Bowling Alone: America's Declining Social Capital*, *Journal of Democracy*, 6 (1): 65-78. (2004「ひとりでボウリングをする—アメリカにおけるソーシャル・キャピタルの減退」『ソーシャル・キャピタル』大守隆・宮川公男編 東洋経済新報社.)
- 齊藤和彦. 2001「中近東諸国における身体教育の

- 特質と国際協力のあり方に関する研究」平成 12 年度国際協力事業団客員研究員報告書 国際協力事業団国際協力総合研修所。
- 佐藤幸男. 1997 「近代世界システムと島嶼国・地域の問題群」塩田光喜編『海洋島嶼国の原像と変貌』研究双書 473 アジア経済研究所, 325-373.
- United Nations. 1992 *UN implications of the application of the new criteria for identifying the least developing countries* (A/47/278)
- World Bank. 1998 *The Initiative on Defining, Monitoring and Measuring Social Capital: Overviewing and Program Description*, Social Capital Initiative Working Paper No. 1, Washington, D. C.
- 吉見俊哉. 1994 「運動会の思想—明治日本と祝祭文化—」思想 845 : 137-162.